

された低地遺跡である。流木らしい材木が多く見られたといわれているが明確な住居跡は確認されていない。

出土品には、鐘崎式・西平式・三万田式・御領式の各型式の土器片のほか石鏃・石皿・摺石・敲石・石匙などの石器類のほか扁平打製石斧一四本も出土し、ドングリの貯蔵穴も見られた。縄文時代後期の遺跡である。(写真2参照)

(五) 小豆田遺跡 (行橋市下柳田)

井尻川の護岸工事中に川底の約一坪下の堆積層から縄文時代中期の土器が出土した。また鐘崎式・西平式の土器片も出土しているので、縄文時代中期から後期にかけての遺跡と思われる。

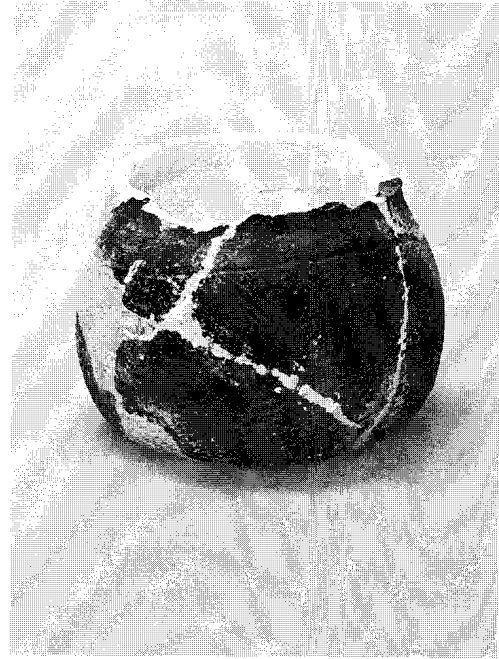


写真2 黒田(種生)遺跡出土土器
(行橋市教育委員会提供)

四 犀川町の縄文時代

犀川町域ではごく最近まで縄文時代の遺跡は発見されていなかったが、平成二年(一九九〇)になって圃場整備事業に先立つ発掘調査によって出土し始めた。

現在まで発見された遺跡としては、自在丸遺跡・タカデ遺跡・寺門遺跡・五反田遺跡・清四郎遺跡がある。いずれも遺跡としては残存状態が悪く、遺物も少ないために縄文人の生活の具体的な復元ができるものではないが、しかし自在丸遺跡と寺門遺跡からは縄文時代の早期に位置づけられる押型文土器が出土しており、同じ時期の土器を出土している吉木遺跡(豊前市)・松丸遺跡(築城町)とともに豊前地方の縄文時代を考えていくうえからも貴重な遺跡である。また、タカデ遺跡や五反田遺跡・清四郎遺跡からは条痕調整の土器片が出土しており、縄文時代晚期に位置づけられている。(第3・4表参照)

これらの遺跡はともに河岸段丘上や川に近い丘陵先端部に位置しているが、内陸部における縄文人の居住環境を考えていくうえからも、またこの地方の先土器(旧石器)時代から縄文時代に引き続くこの地方の人々の営みを解き明かすうえからも貴重な遺跡となっている。

採集や狩猟を中心としたこの時代に、恐らく家族を中心に血縁で結ばれた小集団の人々が谷ごととに今川や祓川などの河川に沿って点々と小集落を形成し生活を営んでいたことが想像されるが、今後縄文時代中期の遺跡も発見されていくことであろうし、そうすればさらにこの時代の姿が具体的に明らかにされていくものと思われる。